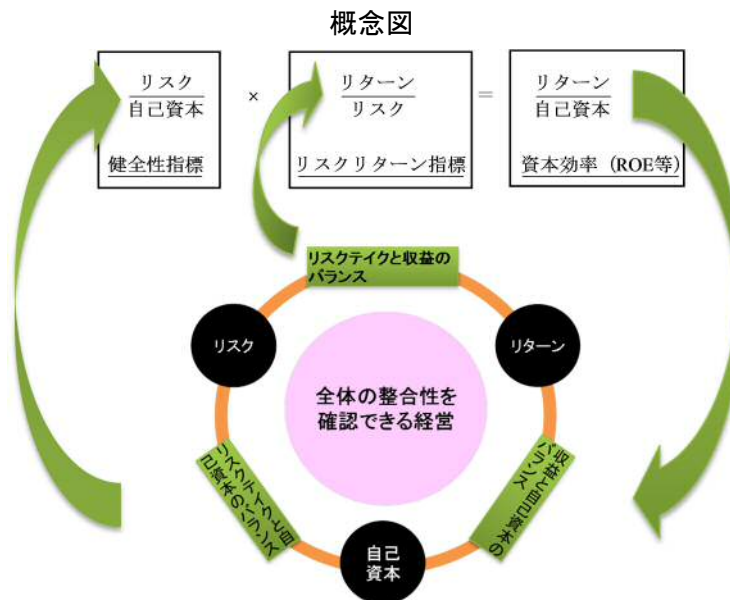


保険会社におけるリスクとソルベンシーの自己評価に関する報告書 (ORSA¹レポート) 及び統合的リスク管理(ERM²) 態勢ヒアリング に基づくERM 評価の結果概要について

1. 背景

下記の関係式から、自己資本が一定であると仮定すれば、保険会社はリスクを増加させるか、リターンを向上させるかのどちらかにより、資本効率を向上させることができる。しかし、たとえ予期せぬリスクが顕在化したとしても保険金支払能力を維持するためには、リスクテイクに対して自己資本との見合いで一定の限度を設けなければならない。その上で資本効率を向上させ将来にわたってビジネスを持続可能とするためには、自己資本を有効に活用し、リターンを向上させることが重要な方策となる。



このような観点から、保険会社はERMの高度化を通じ、将来にわたって保険金を確実に支払えるよう充実した自己資本を保つとともに、保険契約者や株主に対して適切に利益を還元するために、高度なリスク管理に支えられたリターンの向上を図ることが求められる。

2. ERM 評価の実施

ERM を促進する一環として、原則 2015 年 3 月末時点における ORSA の状況を、

¹ Own Risk and Solvency Assessment の略。保険会社自らが現在及び将来のリスクと資本等を比較して資本等の十分性評価を行うとともに、リスクテイク戦略等の妥当性を総合的に検証するプロセス。

² Enterprise Risk Management の略。潜在的に重要なリスクを含め、保険会社の直面するリスクを総合的に捉え、保険会社の自己資本等と比較・対照し、更に、保険引受けや保険料率設定等のフロー面を含めて、事業全体としてリスクをコントロールする、自己管理型のリスク管理を行うこと。

保険会社がリスクとソルベンシーの自己評価に関する報告書(ORSA レポート)として取りまとめ、金融庁へ提出(提出期限:2015年9月末)する取組みを2015年度より開始した。

さらに、各社の ORSA レポートを有効に活用し、同レポートをもとにしたERMヒアリングを実施した上で、保険会社のERM評価を行った。平成 27 事務年度については、規模特性の観点から保険料等収入等に基づき保険持株会社8社、生命保険会社 25 社、損害保険会社 23 社を選定³し評価を実施した⁴。

ERM評価にあたっては、評価目線を作成し、「リスク文化とリスクガバナンス」、「リスクコントロールと資本の十分性」、「リスクプロファイルとリスクの測定」及び「経営への活用」といった項目を検証し、ERMに関する態勢が整備されているか、ERMの考え方が保険会社内に浸透しているかといった観点から確認を行った(評価目線の概要については、別添「ERM 評価目線の概要 (2016年6月版)」を参照)。なお、評価目線は2016年6月時点で作成したものであり、今後各保険会社のERMの高度化の進捗状況等に合わせて見直しがあり得る。

3. ERM評価の結果概要

各保険会社のERM評価結果については、レベル1～レベル5に区分し、それぞれの内容については下記のとおりである。

ERM 評価レベルの概要

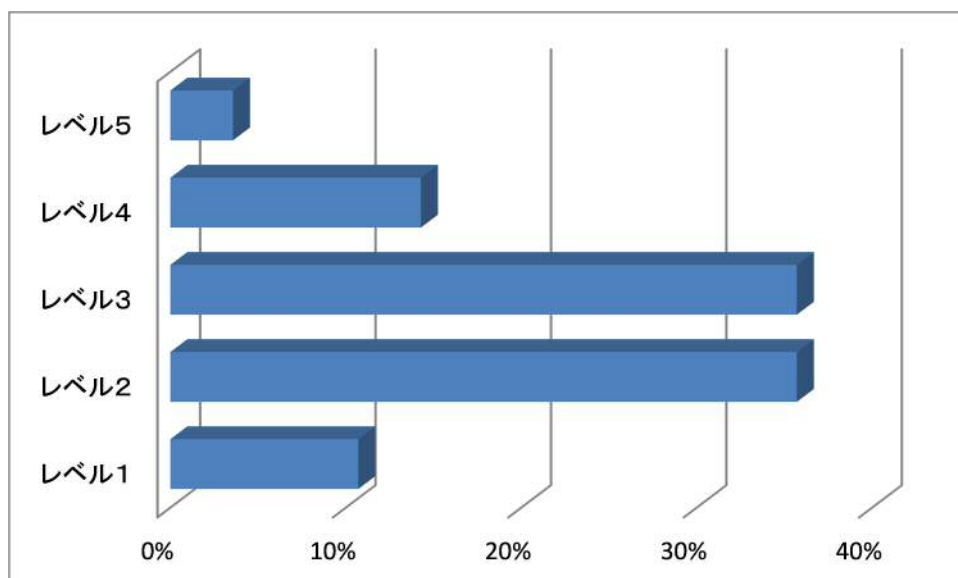
評価レベル	健全性面	+	収益性面
レベル5	資本がリスクを十分上回っており、かつ健全性を確保する強固な態勢を保有している。		健全性を確保した上で、収益性を向上させる先進的な取組みが定着している。
レベル4	資本がリスクを十分上回り、健全性を確保する態勢を保有しているものの、強固な態勢とまではいえない。 又は 健全性を確保する強固な態勢を保有し、一定程度健全性を確保しているものの、十分な健全性を確保しているとはいえない。		健全性を確保した上で、収益性を向上させる先進的な取組みを導入している。
レベル3	一定程度健全性を確保し、かつ健全性を確保する態勢を保有している。	+	健全性を確保した上で、収益性を向上させる先進的な取組みを検討中。
レベル2	一定程度健全性を確保しているものの、健全性を確保する態勢が弱い。 又は 健全性に課題があるものの、健全性を確保する態勢を保有している。		健全性を確保した上で、収益性を向上させる取組みは、将来の課題として認識。
レベル1	健全性に課題があり、また健全性を確保するシステムが弱い。		課題認識なし。

³ 保険持株会社(日本郵政株式会社を除く全社)、保険料等収入が1,000億円以上の国内生命保険会社及び外国生命保険会社、国内損害保険会社(日本地震再保険株式会社を除く)及び正味収入保険料が200億円以上の外国損害保険会社。なお、保険持株会社が保険子会社を含めてORSAレポートを作成し、当該ORSAレポートの提出をもって当該保険子会社のORSAレポート提出に代えている場合は、保険持株会社のみを評価対象とした。

⁴ 評価の対象としなかった社については、平成28事務年度以降に評価を実施することを検討。

ERM を健全性確保に加え、リスク文化の醸成や収益性の向上にも活用し、経営全体に活かすガバナンスを備えた社は未だ一部であり、評価結果に以下のようなばらつきがみられた。

参考 ERM 評価レベルの分布状況（速報）



(注) 今年度 ERM 評価の対象とした保険持株会社及び保険会社(計 56 社)の評価結果を単純にグラフ化

「リスク文化とリスクガバナンス」、「リスクコントロールと資本の十分性」、「リスクプロファイルとリスクの測定」及び「経営への活用」といった項目別の評価結果の概要については、以下のような状況であった。

○ リスク文化とリスクガバナンス

大手損害保険会社(グループ)及び一部の生命保険会社(グループ)において、以下のような先進的な事例が見受けられ、一定程度のリスク文化が社内に醸成されていた。しかしながら、多くの保険会社においては、ERM に基づく考え方を今後社内浸透させていく段階であり、リスク文化の醸成はこれからという状況であった。

【先進的な事例】

- ✓ 社内研修や経営計画の社内周知等を通じ、リスク選好等の ERM に関する事項が社内に浸透している、または浸透させる仕組みがある。
- ✓ ERM を、中期経営計画を策定及び実行する際の中心と位置付け、ERM に基づいて健全性を確保しつつ、環境変化の中でも利益成長と資本効率を持続的に高めていくこととしている。
- ✓ 企業買収等において、リスク文化の整合性や ERM に関する各取組みの整合性を確認するなど、ERM を有効に活用している。

○ リスクコントロールと資本の十分性

大手保険会社(グループ)を中心に、以下のような先進的な事例が見受けられ、リスクに対する資本の十分性を確保する態勢が一定程度整備されていた。しかしながら、多くの中小保険会社においては、経済価値ベースに基づく健全性に関する内部管理上の取組み等はこれからという状況であった。

【先進的な事例】

- ✓ 現行のソルベンシーマージン比率と経済価値ベースのソルベンシーマージン比率の双方により、内部管理を実施している。
- ✓ 経営に重要な影響を与えるストレスシナリオを特定し、当該ストレステスト結果に対して対応策を策定するなど、ストレステストを有効に活用している。

○ リスクプロファイルとリスクの測定

大手保険会社(グループ)を中心に、以下のような先進的な事例が見受けられ、計量可能なリスクのみならず、エマージングリスク⁵等の計量できないリスクについても把握する態勢が一定程度整備されていた。しかしながら、多くの中小保険会社においては、このような取組みやモデルガバナンス等に関する取組みはこれからの課題であるといった状況であった。

【先進的な事例】

- ✓ 内部モデルの管理に関する規程を設け、開発部門、計測部門から独立した部門が内部モデルを検証する態勢を整備している。
- ✓ 計量困難なリスクを含めたボトムアップでの網羅的なリスクの洗い出しを実施し、重要性を評価・分析した上で、重要なリスクについて対応策の検討などを実施している。
- ✓ エマージングリスクに関して、役員等へのヒアリングを実施するなど幅広い洗い出しを実施し、特定されたエマージングリスクについて継続的なモニタリングを実施している。

○ 経営への活用

大手損害保険会社(グループ)及び一部の生命保険会社(グループ)において、以下のような先進的な事例が見受けられ、資本配賦等を通じERMを経営に活用していた。しかしながら、多くの保険会社においては、ERMの活用は健全性に関する取組みが中心であり、経営への活用はこれからという状況であった。

【先進的な事例】

- ✓ リスクを考慮した収益性指標等を含め、ソルベンシーマージン比率(現行規制ベース及び経済価値ベース)に関する3~5年のシミュレーションを行い、社内における意思決定に反映している。

⁵ 過去とは異なる要因や環境の変化により発生し、保険会社に重要な影響を及ぼす可能性があるリスク。

- ✓ リスクリターン指標により各グループ子会社に対する資本配賦額等の調整を行い、グループまたは会社全体の健全性及び収益性を向上させている。また、このような取組みを通じ、グループ又は会社全体のガバナンスが向上している。
- ✓ ROR(リターン・オン・リスク)等のリスクを考慮した収益性指標を活用し、保険商品のリスクリターンのバランスを取るべく販売施策や料率に活用している。

4. 今後の課題

ERM評価は、定量的・画一的に健全性を評価するのみではなく、適切なリスク文化・ガバナンスと高度なリスク管理態勢を備えた保険会社における積極的なリスクテイクを合わせて評価する枠組みであり、健全性を維持した上で保険会社の適切な成長を促す観点から、引き続きERMの高度化を促進していく。

また、ERMヒアリング及びORSAレポートを通じ、現時点の静的な健全性評価にとどまらず、将来の動的な健全性を幅広く分析することで、より実態に即した監督を行っていく。

以上